

# 学校コミュニティにおける 心理職活用システムに関する基礎的研究

—修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによるカテゴリーの生成—  
Basic Study on the System of the Use of School Psychologists in School Community;  
Categories Developed with a Modified Grounded Theory Approach

---

山口豊一・伊藤花奈・下平幸枝

Toyokazu YAMAGUCHI, Kana ITOU, Yukie SHIMOHIRA

## 要旨

本研究の目的は、学校コミュニティにおける心理職活用システムを明らかにすることである。調査は、3つの機関における計7名が対象とされた。調査時期は、2011年7月～8月であった。第一筆者によって、調査対象者（グループ面接）に半構造化面接が実施された。分析方法として、質的研究法の1つである修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチが用いられた。

その結果、28の概念が抽出され、9つの下位カテゴリーに統合された。そしてそれらは、さらに5つの上位カテゴリー《学校の運営》《行政のマネジメント》《心理職の雇用と資質》《連携の推進》《研究の蓄積》に統合された。これらの上位カテゴリーは、《学校の運営》が、《行政のマネジメント》《心理職の雇用と資質》《連携の推進》と相互に影響し合っていることが示唆された。

キーワード：学校コミュニティ、心理職、活用システム、

修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ、カテゴリー

## Summary

The purpose of this study is to show the system of using psychologists in school communities. The research targeted 7 peoples from 3 organizations. The period of the research was July through August of 2011. The first author (Yamaguchi) conducted a semi-structural group interview on them. As analytical method, the modified grounded theory approach, which is one of the qualitative study methods, was used.

As a result, 28 concepts were abstracted and were integrated into 9 lower categories, which were then integrated into 5 upper categories such as “running of school,” “administrative management,” “employment and qualifications of psychologists,” “promoting cooperation” and “accumulation of research results.” This study indicates that the upper categories influence each other among them; for example, “running of school” influences “administrative management,” and “employment and qualifications of psychologists.”

Keywords: school communities; psychologists; system of making use;

modified grounded theory approach; categories

## 1 問題と目的

学校コミュニティ（学校を中心とする教育委員会単位の地域・社会）の中でスクールカウンセラー等の心理職（スクールカウンセラー、心の教室相談員、ボランティア相談員や学生相談員等をさす、以下「心理職」）に対するニーズが高まっている。そして、すでに平成17年度までに全国の全ての公立中学校にスクールカウンセラーが派遣された。

学校コミュニティの中心である学校は従来、教職員のみで構成されてきた。その学校組織に異職種の、それも非常勤の心理職を受け入れることは学校側にも多くの戸惑いを引き起こしている（伊藤,2002）。どのように学校組織の中で心理職を位置づけ、活用していけばよいのかに関する包括的、実証的な研究はみられず、個々の管理職及び個々の心理職の力量にゆだねられているのが現状である。管理職もしくは心理職が異動すれば、その学校ではまた白紙に近い状態から心理職の活用方法、心理職の仕事のあり方を考えていかなければならない。学校によっては、心理職と学校側を橋渡しする担当者がない場合もあり、また心理職が学校側のニーズを考慮せずに独自の考えで動き、学校側の信頼を得られずに孤立する状況も報告されている（伊藤, 2002）。我が国においても、心理職の学校現場への導入は始まり、平成7年より文部省（現、文部科学省）によるスクールカウンセラー（以下、SC）の配置事業が定着しつつある。けれども、我が国の学校コミュニティの中で心理職を活用するための効果的なシステムの開発は未開拓の分野であり、学校心理学の緊急課題と考えられる（石隈, 1999）。これまでの研究では生徒、保護者、教員へのSCに対するニーズ調査が行われているが（例：石隈・小野瀬, 1997；山口・水野・石隈, 2004 など）、管理職および教育委員会への調査はみられない。管理職および教育委員会の方針は心理職の活用システムを作っていく上で極めて重要な位置を占めている。

学校コミュニティにおいて心理職に求められるものとして、1) 児童・生徒、保護者の相談、2) 教員・保護者へのコンサルテーション、3) 心理教育プログラム、4) 危機介入・緊急対応、5) 地域援助、6) システム構築、の6つがあげられている（石隈, 1999）。このうち1)～4)については、心理臨床の知見に基づき、研究が次第に積み重ねられつつある。しかし、5) 地域援助、6) システム構築（「ここでいう援助活動システムとは、心理職を活用する体制・組織をさす」）に関する研究はその必要性が指摘されながらも極めて少なく、さまざまな試みが事例的に報告されている状況にある。また、システム構築にあたっては、非常勤の心理職が一人で開拓していくことは現実的には難しい状況にあり、学校を中心とする学校コミュニティの中で考えていかなければならない課題と考えられる。とくに、管理職、教育委員会などの管理者側がどのように心理職を位置づけ、効果的に活用するかは、システム構築の主要な部分を占めるが、前述のように、これまで、そうした管理職側の対応や活用体制等のシステムについて明らかにした研究はみられない。

また、アメリカは学校における心理職の歴史は長いが勤務状況や求められる仕事が我が国とは異なり (Thomas & Stephan, 2002)、アメリカにおけるシステムをそのまま日本に持って来るということはできない。わが国の学校の状況に応じた心理職活用の方向性について検討を重ねていくことは極めて重要な意義を持つと考えられる。地域援助、援助活動システムのモデルが提示されることで、今後学校コミュニティにおける心理職のより効果的かつ積極的な活用が期待される。

そこで、本研究は主に学校組織の責任者である管理職や教育委員会を調査対象として、学校コミュニティにおける心理職の効果的なシステムの開発のための基礎的研究を行う。具体的にはまず、元あるいは前学校の管理職、教育委員会の指導主事等に対する半構造化調査を行い、現状の課題について整理し、システムのあり方について探索的に検討する。そして、学校コミュニティにおける心理職活用システムを提示する。

## 2 研究方法

### (1) 調査内容

学校を中心とする学校コミュニティにおけるスクールカウンセラー等の心理職の活用に関する調査を県及び市町村教育委員会の指導主事、相談員、職員を対象として調査を実施する。

調査内容は、面接調査からなり、以下の点について調査する。

- ① 管理職として心理職に望むこと
- ② 教育委員会として心理職に望むこと
- ③ 学校における心理職の活用の状況と実態
- ④ 教育委員会における心理職の活用の状況と実態
- ⑤ 学校における心理職活用システムで考えていること
- ⑥ 教育委員会における心理職活用システムで考えていること
- ⑦ 現在の心理職活用に対する満足度
- ⑧ 現在の心理職活用の問題点

### (2) 手続き

第一筆者が以下の3件 (A, B, C) のインタビュー調査を行った。

(A) 元教師2名 (元中学校長, 元高校校長) と県教育研修センター課長にグループインタビュー調査を行った。インタビュー調査対象者の概要は以下の通りである。

a : 元中学校長 : 男性 行政経験あり (県教育研修センター課長)

教育相談の姿勢は、積極的であり、チーム援助に進んで取り組んでいる。

b：元高校校長：男性，行政経験あり（県教育委員会課長）

教育相談の姿勢は積極的であり，高校教育改革に取り組む。

c：県教育研修センター課長：男性，市教育委員会指導主事経験あり，教頭経験あり

教育相談の姿勢は，主体的である。教育委員会では，スクールカウンセラー等の配置，活用に携わる。

第一筆者：本研究の主任担当者（司会）

(B) 市教育相談センターの所長，副所長にグループインタビュー調査を行った。インタビュー調査対象者の概要は以下の通りである。

d：センター所長：男性，前中学校長，非常勤勤務

教育相談の姿勢は積極的で，相談だよりを出すなどして，相談員の育成に熱心である。

e：センター副所長：男性，常勤勤務

行政職で相談室の管理・運営を行う。

第一筆者：本研究の主任担当者（司会）

(C) 生徒指導ソーシャルサポートセンター（元適応指導教室）の指導主事，教育相談員にグループインタビューを行った。インタビュー調査対象者の概要は以下の通りである。

f：指導主事：男性，勤務4年目，元教諭

教育相談の姿勢は積極的である。

g：教育相談員：男性，勤務3年目，常勤勤務

教育相談，カウンセリングに極めて積極的である。訪問相談を積極的に行っている。

第一筆者：本研究の主任担当者（司会）

3件のインタビューでは上記の①～⑧が質問された。そして，3件のインタビューはテープに録音され，すべて逐語記録に起こされた。学校心理学研究者1名および臨床心理学専攻の大学院生2名により検討された。データ分析に当たっては，木下（1999，2003）の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを適用し，インタビュー調査対象者の発言からカテゴリーを生成することを目指した。

### 3 分析の過程と結果

#### (1) 予備的分析（ステップ1）

ステップ1では，分析テーマを設定するために，インタビュー調査対象者の発言データから逐

語記録の作成を行った。発言者の内容を一言ごとにまとめた。そして、そのデータについて内容的に分析を行った (Strauss & Corbin, 1998; Flick, 1995; 木下, 1999, 2003; 原田, 2003, 2004)。

## (2) インタビュー調査対象者の発言データの概念化 1 (ステップ 2)

ステップ 2 では、インタビュー調査対象者の発言データの概念化を行った。

手続きとしては、インタビュー (A) のデータを対象に、インタビュー調査対象者の発言データを内容のまとまりごとに集め、ワークシートを作成した (木下, 1999)。そして、抽象的な概念名をつけた。TABLE 1 はその具体的手続き例である。概念は、学校心理学の研究者 1 名及び臨床心理学専攻の大学院生 2 名により検討された。その結果、21 の概念が生成された。以下にそれを記す。[①先生の問題], [②生徒の問題], [③問題意識], [④学校システム (組織)], [⑤養護教諭の活用], [⑥コーディネーター], [⑦マネジメント], [⑧スクールカウンセラーの意識], [⑨スクールカウンセラーの能力], [⑩スクールカウンセラーのプラス面], [⑪スクールカウンセラーの環境], [⑫スクールカウンセラーの勤務], [⑬スクールカウンセラー・心理職の配置], [⑭スクールカウンセラーの雇用条件], [⑮行政 (市・町・村) の組織], [⑯行政 (国・県) の方針], [⑰行政の研修], [⑱行政の予算], [⑲事例・蓄積], [⑳研究・調査], [㉑事例検討会] であった。TABLE 1 に示された「発言データ」は一部であり、実際には多くのデータが各々の「概念」にまとめられた。

TABLE 1 インタビュー調査対象者の発言データの概念化の手続き例 (ステップ 2)

概念		スクールカウンセラーの能力
調査	定義	スクールカウンセラー個人に求められる力量や役割である。
A	153	期待したいけどね。学校としては国家資格者を取ろうとしてるわけだから、学会は医者と同じにしたいって思ってるわけだ。国家資格じゃないけど。医療機関でも 100 万でも来ないって医者があるんだから。それと同じになっちゃう可能性があるんだよ。この時代がますます続くと精神科医とか SC 的な人間の要望が強くなるじゃない。おかしくなっちゃうよ、人間が。それだけの医者が必要になってくるわけだよな。医者なり、カウンセラーなりがな。
A	154	でも学校臨床が好きだって人もいるので。
A	163	すごい差があるでしょう。大学の先生という席があって、SC で無理矢理頼まれてるから忙しいんだけどきてる人と、若くして資格を取って SC をして雇ってもらってる人じゃものすごい違いがあるよね。大学の先生の場合は年金なんかは保険とかちゃんとしているわけだ。でも、若い人らは全く不透明なわけだよな。違いがものすごい極端なんだよ。ありすぎるね。SC でもばらばらだね。
A	260	再現性がないからシステムが作用しなくなるわけですよ。その場でその子どもたちにあってここからスタートだから、そこからアプローチしていけばいいと。

TABLE 1 インタビュー調査対象者の発言データの概念化の手続き例(ステップ2) つづき

A	263	後は本質的な方法にたどり着けていないんだよね。表面的なとこだけうまく繕って、本質的なところに手が入らないから、同じことを同じようにするんだよね。それが普通なのかも。逆に本質に手を突っ込んでわかつちゃったらそれで終わっちゃうから。それじゃダメなのかもね。
A	312	学生も心理学専攻でそっちの方に就職してもいいかという人が多いんですよ。
A	319	そっちに相談するところがあるなら自分としては、教育相談的姿勢を高めることは必要なのかなと思う。
A	324	相談員では高校を卒業した生徒は対象外であるからね。
A	343	昔の人は人間見てるね。システムは人間が居なきゃ意味ないもんな。マンパワーは必要なんだね。
A	344	ヒューマンエラーは必ずありますけどね。でもあれは金を使いたくないからとか、知的障害者を入れてたとかありましたようですけどね。
理論的メモ		資格に裏付けられた能力や学校臨床に関する興味関心も能力の一部である。スクールカウンセラーの能力は、同じ水準を維持すべきであるが、現状としてはばらばらである。システムを動かすのは人であり、スクールカウンセラーの能力である。

### (3) インタビュー調査対象者の発言データの概念化2 (ステップ3)

ステップ3では、ステップ2で概念化した発言データにさらにインタビュー (B), (C) のデータを追加し、概念化を行った。

手続きはステップ2と同様に行った。TABLE 2はその具体的な手続き例である。その結果、ステップ2で生成された21の概念に追加・修正され28の概念が生成された。以下にそれを記す。[①先生の問題], [②生徒の問題], [③問題意識], [④学校システム(組織)], [⑤養護教諭の活用], [⑥コーディネーター], [⑦マネジメント], [⑧学校の事例検討会], [⑨学校のニーズ], [⑩スクールカウンセラーの意識], [⑪スクールカウンセラーの能力], [⑫スクールカウンセラーのプラス面], [⑬スクールカウンセラーの環境], [⑭スクールカウンセラーの雇用・勤務], [⑮スクールカウンセラーの雇用条件], [⑯スクールカウンセラー・心理職の配置], [⑰行政(市・町・村)の組織], [⑱行政(国・県)の方針], [⑲行政の研修], [⑳行政の事例検討会], [㉑行政の予算], [㉒施設・設備], [㉓宣伝・PR], [㉔学校と行政の連携], [㉕相談室の活用], [㉖連携の課題], [㉗事例・蓄積], [㉘研究・調査]であった(TABLE 3)。TABLE 2, TABLE 3に示された「発言データ」は一部であり、実際には多くのデータが各々の「概念」にまとめられ、3件のデータが十分に説明されるまで、概念は繰り返し修正された。

### (4) 下位カテゴリーへの統合 (ステップ4)

ステップ4では、インタビュー調査対象者の発言の「下位カテゴリー」を生成することを目指した。

TABLE 2 インタビュー調査対象者の発言データの概念化の手続き例 (ステップ3)

概念		スクールカウンセラーの能力
調査	定義	スクールカウンセラー個人に求められる力量や役割である。
A	153	期待したいけどね。学校としては国家資格者を取ろうとしているわけだから、学会は医者と同じにしたいって思ってるわけだ。国家資格じゃないけど、なっちゃったら。医療機関でも100万でも来ないって医者があるんだから。それと同じになっちゃう可能性があるんだよ。この時代がますます続くと精神科医とかSC的な人間の要望が強くなるじゃない。おかしくなっちゃうよ、人間が。それだけの医者が必要になってくるわけだよな。医者なりカウンセラーなりがな。
A	154	でも学校臨床が好きだって人もいるので。
A	163	すごい差があるでしょう。大学の先生という席があって、SCで無理矢理頼まれているから忙しいんだけどきてる人と、若くして資格を取ってSCをして雇ってもらってる人じゃものすごい違いがあるよね。大学の先生の場合は年金なんかは保険とかちゃんとしているわけだ。でも、若い人らは全く不透明なわけだよ。違いがものすごい極端なんだよ。ありすぎるね。SCでもばらばらだね。
A	260	再現性がないからシステムが作用しなくなるわけですよ。その場でその子どもたちにあってここからスタートだから、そこからアプローチしていけばいいと。
A	263	後は本質的な方法にたどり着いてないんだよね。表面的なところだけうまく繕って、本質的なところに手が入らないから、同じことを同じ用にするんだよね。それが普通なのかも。逆に本質に手を突っ込んでわかっちゃったらそれで終わっちゃうから。それじゃダメなのかもね。
A	312	学生も心理学専攻でそっちの方に就職してもいいかという人が多いんですよ。
A	319	そっちに相談するところがあるなら自分としては、教育相談的姿勢を高めることは必要ないのかなと思う。
A	324	相談員では高校を卒業した生徒は対象外であるからね。
A	343	昔の人は人間見てるね。システムは人間が居なきゃ意味ないもんな。マンパワーは必要なんだね。
A	344	ヒューマンエラーは必ずありますけどね。でもあれは金を使いたくないからとか知的障害者を入れてたとかありましたよですけどね。
B	26	先の方は3、4年目になるかな。彼女は盲学校というものを理解していますね。
B	37	家庭環境や地域社会の理解に関してなんですけど、この時代ですから両親がそろってないこともあたり前のようにありますし、経済的にも大変なこともありますし、複雑ですよ。家庭についていうと、自分が生きてきた世界を中心に考えがちですけども、心理職をやる人はそんなに大変な環境で育っている訳じゃないですから。でも公立学校に通う子ですから、義務教育で、親も学校になんかかまっていられないって親は多いですから、それでも何とかその子たちを学校に向き合わせて、意欲を持って勉強に向わせると。
B	68	他市から来て、思うのは、教員が子どもを見る見方の中に児童理解、生徒理解というものはかなり意識してやっているなと思いますね。特に中学校なんかは、元々の風土もあると思いますが、不登校の数が県内でもかなり少ない。それを支えているのが、生徒のことを考えている生徒、そこを支えているのが校内相談員とかじゃないかなとは思いますが。中学校になると生意気盛りになりますから、上から押しさえつけようとして生徒と対立関係とかありますけど、比較的落ち着いていますね。家庭環境もいい家庭だけではないですけども。
C	16	一応決まっているんですけど、個人的な意見ですが、相談員と言うのはなるべくオールマイティの方がいいと思います。大体、Dさん以外の勤務は週に3日になるので、今日Dさんと訪問員の2人になると通室ができないという形になってしまうので、訪問も通室もできるように。ただ、相談員はやってのけてしまっているのです。
理論的メモ		資格に裏付けられた能力や、学校臨床に関する興味関心も能力の一部である。スクールカウンセラーの能力は、同じ水準を維持すべきであるが、現状としてはばらばらである。システムを動かすのは人であり、スクールカウンセラーの能力である。

TABLE 3 概念名とその発言データ例(ステップ3)

概念	発言データ
1. 先生の問題	教員の求められる物が多岐にわたっちゃってて、もう先生が疲弊しちゃいますよね。
2. 生徒の問題	そこまでは手を出さないよね。高校生って学校でもってやるから、今のよう な問題がものすごいことになるんだよね。地域でやってもらえないから、学 校でやらざるを得ない状況になっちゃってるよね。
3. 問題意識	システムを動かす人はどうやって動かせばいいのか。問題意識を持つてると いうことじゃないかなって。感性があるのかなのか、現状をどれだけ捉え て実際に動かすところに向けられるかどうか。問題意識がないのにくら しても意味がない。
4. 学校システム(組織)	どうシステムを構築していけるかってね。
5. 養護教諭の活用	養護教諭ならきつとシビアに見てるよ。県の全員じゃないけど、三分の一 くらい。全員だと集まりきらないから。
6. コーディネーター	今のところ教育委員会ではコーディネーターを必ずおいて、コーディネ ーターって生徒指導主事とかがやってるんだよね。
7. マネジメント	大事なのは校長のマネジメントだとか、教育委員会のマネジメントが大事。
8. 学校の事例検討会	事例検討会に参加してもらおうとかね。共通の養護教諭とね。大事なシステ ムの一つになる。そういう機会に参加してもらって。先生方へのアドバイスと かね。そこで活用する。生徒、保護者の面接以外で。先生の相談役になっ てもらう。
9. 学校のニーズ	このごろやたら出てきてくれて、相談してくれるから通室はやってないと思 っちゃうんですね。もうちょっと、学校訪問とか家庭訪問を充実させてほ しいことなんでしょうね。課題をお聞きしたんですが、人的ものも大きいよ うですね。
10. スクールカウンセラーの意識	学校なんかで心配な子がいると授業なんかも、見てきてくれたりとか、観察 なんかをしてくれると、学校の中の一人のスタッフ。中には先生の言う通り、 今日来る日だ、なんとかしなきゃとか。
11. スクールカウンセラーの能力	再現性がないからシステムが作用しなくなるわけですよ。その場でその子 どもたちに来てここからスタートだから、そこからアプローチしていけば いいと。
12. スクールカウンセラーのプラス面	教育相談も先生が全部やってくださいって。養護教諭とかこころのケアだ とかスタッフで何とかやろうっていう。ほころびを埋めるためにSCを置く感 覚なんでしょうね。
13. スクールカウンセラーの環境	学校に配置しちゃってるから学校に机も何もあるわけだし、学校に希望し ているわけだよね、現実。高校配置とはいかないよね。いけないよね。そこ いけるくらいなら高校いくもん。
14. スクールカウンセラーの雇用・勤務	だけど、週には最低8時間はきてもらわないと、お客さんになっちゃう。
15. スクールカウンセラーの雇用条件	週に5校掛け持てばSCから見れば常勤なんだよ。学校からしたら週だけ ど。常勤の場合は単純計算で100万の収入があるんですよ。実際は80万か。
16. スクールカウンセラー・心理職の配置	いろんな学生を学校に行かす。学生をいろんな学校に行かせて相談活動も するかも、でも、お友達みたいに入っている。学習が後れる子を取り出して 個室の時の相手にさせたりとか。これはボランティアだから一握りの学生しか 入ってないから。
17. 行政(市・町・村)の組織	管理職を中心とした教育委員会を中心としたシステムをどうしたらいいか。
18. 行政(国・県)の方針	管理職にもね、働きかけは教育委員会からしてますもんね。
19. 行政の研修	1月から高校の全部が集まって生徒指導のやりますよ。
20. 行政の事例検討会	校内相談員とかSCをかねて、全員を集めて、情報交換会を行っているとい うのがうまくいっていることであり。ここは研修会はありますか。
21. 行政の予算	こんなに日本の国は、教育の予算が少ない国である。だけど、他の国では見 られない成果も上げている。いかに日本の教員が優秀なのか。

TABLE 3 概念名とその発言データ例(ステップ3) つづき

22. 施設・設備	引越して。わきの建物が保健センターです。あまり使ってないので。心の健康はいいのではないかと、市当局にもかけ合いました。今年うまく入れました。
23. 宣伝・P R	適応指導教室って普通、生徒が来ないとかP R不足とかいろいろやるんだよね。
24. 学校と行政の連携	家庭訪問からセンターを必ずつながないといけないことではないと思うんですけど。学校に行ける可能性のある子をわざわざつなげる必要はないと思うので、直接学校につなげたいと。
25. 相談室の活用	生徒指導トータルサポートセンターに適応指導教室を変えて三本柱で適応指導教室的な機能と、生徒指導支援室、訪問相談を行ったり、特別相談窓口を作って、主に訪問と。
26. 連携の課題	心理職が教員を理解すると同時に、学校も心理職の立場とか職歴なんかを理解してもらえると相互理解になる。
27. 事例・蓄積	PDCAサイクルもないよね。それを総括して、なぜ効果が出たかを明らかにして次の事例に生かすっていう発想がないんだよね。
28. 研究・調査	やっぱり不登校は徐々に減ってって成果が上がったっていう報告はあがってますよ。SCの臨床心理士側の研究。

TABLE 4 概念のカテゴリー化(ステップ4・5)

概念	下位カテゴリー	上位カテゴリー	
1. 先生の問題	学校の問題とニーズ	学校の運営	
2. 生徒の問題			
3. 問題意識			
9. 学校のニーズ			
4. 学校システム(組織)			学校の組織と人の活用
5. 養護教諭の活用			
6. コーディネーター			
7. マネジメント			
8. 学校の事例検討会	学校事例の検討		
10. スクールカウンセラーの意識	スクールカウンセラーの資質能力	心理職の雇用と資質	
11. スクールカウンセラーの能力			
12. スクールカウンセラーのプラス面	心理職の雇用		
13. スクールカウンセラーの環境			
14. スクールカウンセラーの雇用・勤務			
15. スクールカウンセラーの雇用条件			
16. スクールカウンセラー・心理職の配置	行政のマネジメント		
17. 行政(市・町・村)の組織			
18. 行政(国・県)の方針			
21. 行政の予算			
22. 施設・設備			
23. 宣伝・P R			
19. 行政の研修	教員の質の向上	行政のマネジメント	
20. 行政の事例検討会			
24. 学校と行政の連携	行政・専門機関との連携	連携の推進	
25. 相談室の活用			
26. 連携の課題			
27. 事例・蓄積	研究の蓄積	研究の蓄積	
28. 研究・調査			

手続きは、ステップ3で生成された「概念」において、共通要素のある「概念のまとめり」を作り、下位カテゴリー化を図った（TABLE 4）。以下に、下位カテゴリーへの統合の例を示す。概念〔①先生の問題〕、〔②生徒の問題〕、〔③問題意識〕、〔⑨学校のニーズ〕は【学校の問題とニーズ】のカテゴリーに統合された。〔④学校システム（組織）〕、〔⑤養護教諭の活用〕、〔⑥コーディネーター〕、〔⑦マネジメント〕は【学校の組織と人の活用】のカテゴリーに統合された。〔⑧学校の事例検討会〕は【学校事例の検討】のカテゴリーになった。〔⑩スクールカウンセラーの意識〕、〔⑪スクールカウンセラーの能力〕、〔⑫スクールカウンセラーのプラス面〕は【スクールカウンセラーの資質能力】のカテゴリーに統合された。〔⑬スクールカウンセラーの環境〕、〔⑭スクールカウンセラーの雇用・勤務〕、〔⑮スクールカウンセラーの雇用条件〕、〔⑯スクールカウンセラー・心理職の配置〕は【心理職の雇用】のカテゴリーに統合された。〔⑰行政（市・町・村）の組織〕、〔⑱行政（国・県）の方針〕、〔行政の予算〕、〔施設・設備〕、〔宣伝・PR〕は【行政のマネジメント】のカテゴリーに統合された。〔⑲行政の研修〕、〔⑳行政の事例検討会〕は【教員の質の向上】のカテゴリーに統合された。〔㉑学校と行政の連携〕、〔㉒相談室の活用〕、〔㉓連携の課題〕は【行政・専門機関との連携】のカテゴリーに統合された。〔㉔事例・蓄積〕、〔㉕研究・調査〕は【研究の蓄積】のカテゴリーに統合された。

9つの下位カテゴリーと3件のデータが十分説明されるまで、下位カテゴリーは繰り返し修正された。

#### （5）上位カテゴリーへの統合（ステップ5）

ステップ5では、ステップ4で生成された「下位カテゴリー」をさらに「上位カテゴリー」としてまとめ、上位カテゴリー化を図った（TABLE 4）。

以下に上位カテゴリーへの統合の例を示す。

【学校の問題とニーズ】【学校の組織と人の活用】【学校事例の検討】は《学校の運営》に統合された。【スクールカウンセラーの資質能力】【心理職の雇用】は《心理職の雇用と資質》に統合された。【行政のマネジメント】【教員の質の向上】は《行政のマネジメント》に統合された。また、【行政・専門機関との連携】は《連携の推進》、【研究の蓄積】は《研究の蓄積》として、5つの上位カテゴリーにまとめられた。

5つの上位カテゴリーと9つの下位カテゴリー、3件のデータが十分説明されるまで、上位カテゴリーは繰り返し修正された。

#### （6）カテゴリーの概念図の作成（ステップ6）

ステップ6では、ステップ2～5で生成された概念、下位カテゴリー、上位カテゴリーについて、相互関係を検討し、概念図を作成した（FIGURE 1）。

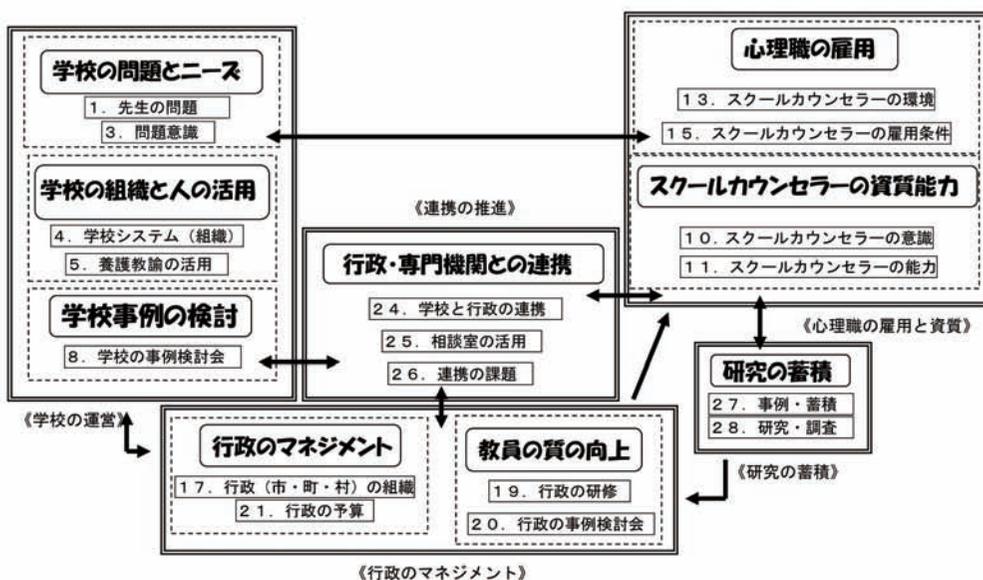


FIGURE 1 学校コミュニティにおける心理職活用システムの概念図

## 4 考察

### (1) 研究から得られた知見

本研究では、「学校コミュニティにおける心理職活用システムに関する基礎的研究」を主題とし、「学校コミュニティにおける効果的な心理職の活用システム」を質的データを基に具体的・探索的に検討することを目的とし、すすめてきた。その結果、28の概念が得られ、9の下位カテゴリー、5の上位カテゴリーにまとめられた。カテゴリー生成を通じて、本研究で新たに見出されたことは、以下のとおりである。

#### 1) 本研究から生成されたカテゴリー

##### (ア) 《学校の運営》

この上位カテゴリーは【学校の問題とニーズ】【学校の組織と人の活用】【学校事例の検討】の3つの下位カテゴリーが統合されたカテゴリーである。学校の運営における課題に関するものである。【学校の問題とニーズ】はシステムの中の「先生の問題」「生徒の問題」とそれらを踏まえた学校のニーズを表すカテゴリーである。このカテゴリーでは、学校の中に先生側の問題と生徒側の問題があり、学校のシステムの中にいる人がそれらの問題を意識して対処していかなければならないということが示唆された。また、それらの問題を解決するために必要な対策が学校のニ

ーズとしてあがってくると考えられる。【学校の組織と人の活用】は学校システムを動かすために必要な資源を表すカテゴリーである。このカテゴリーでは、学校のシステムがどのような構成であるのか、そのシステムを動かすためにコーディネーターや養護教諭を有効に活用する必要があることが示唆された。【学校事例の検討】は、学校の事例検討会の必要性を表すカテゴリーである。学校の事例検討会を活用し、学校システムの状況をシステムの構成員である教員や養護教諭、スクールカウンセラー全体で把握し検討することが重要であることが示唆された。

#### (イ) 《心理職の雇用と資質》

この上位カテゴリーは【心理職の雇用】【スクールカウンセラーの資質能力】の2つの下位カテゴリーが統合されたカテゴリーである。学校の運営に関連する心理職の雇用と資質能力に関するものである。【心理職の雇用】は、学校運営に関連するスクールカウンセラーを中心とする心理職の雇用条件や環境（「スクールカウンセラーの環境」「スクールカウンセラーの雇用条件」）を表すカテゴリーである。このカテゴリーでは、学校から求められるスクールカウンセラーの勤務体制とスクールカウンセラーの雇用条件の厳しさにギャップがあることが示唆された。【スクールカウンセラーの資質能力】は、スクールカウンセラーに求められる意識や能力を表すカテゴリーである。このカテゴリーでは、学校システムの中の一スタッフとして、スクールカウンセラーが学校に積極的に関わる意識、姿勢（「スクールカウンセラーの意識」）が求められていることが示唆された。また、スクールカウンセラーが学校システムの中に存在することで、教員だけでは補えなかった生徒の心理的なケアをより行いやすくなるなどのプラス面（「スクールカウンセラーの能力」）があることも明らかとなった。

#### (ウ) 《行政のマネジメント》

この上位カテゴリーは【行政のマネジメント】【教員の質の向上】の2つの下位カテゴリーが統合されたカテゴリーである。国や県、市町村単位で行われる政策や行政が主催する教員の質の向上を図る試みに関するものである。【行政のマネジメント】は、行政の政策と行政にある資源を表すカテゴリーである。このカテゴリーでは、行政の政策に沿って現場の学校システムの中にいる教員に対する働きかけがあることが明らかとなった。また、学校と連携する施設・機関を十分に活用（「行政（市・町・村）の組織」）するための課題や、教育現場を充実させるための予算（「行政の予算」）が不足していることが示唆された。【教員の質の向上】は、教育現場の教員の質を向上させるために行政が行う試みを表したカテゴリーである。このカテゴリーでは、教育現場の教員や心理職の質を向上させるために、行政が中心となって事例検討会や研修会（「行政の研修」「行政の事例検討会」）を行っていることが明らかとなった。

(エ)《連携の推進》

この上位カテゴリーの下位カテゴリーは【行政・専門機関との連携】であり、学校、行政、各専門機関との連携に関するものである。このカテゴリーでは、問題を抱える子どもに対して、学校・適応指導教室・訪問相談等、教員や心理職が密に連携(「学校と行政の連携」「相談室の活用」)しながら支援をすることが求められていることが示唆された。また、それに伴って教員と心理職が相互に相手の立場、職歴等を理解し合う(「連携の課題」)ことの重要性が明らかとなった。

(オ)《研究の蓄積》

この上位カテゴリーの下位カテゴリーは【研究の蓄積】であり、研究・調査・事例の蓄積に関するものである。このカテゴリーでは、教育現場で行われている研究や調査(「研究・調査」)、実際の事例の蓄積により(「事例・蓄積」)、教育現場の状況の把握と改善策の検討を行っていることが明らかとなった。しかし、これらの研究・調査の結果が十分に活用されていないという現状もあり、様々な研究から得られた知見を活用していくことが今後の課題であると考えられる。

## (2) 学校コミュニティにおける効果的な心理職の活用システムに関する

### 上位カテゴリーの関係

概念図(FIGURE 1)は、インタビュー調査対象者の発言において、カテゴリー同士の影響関係について示したものである。上位カテゴリー《学校の運営》は《心理職の雇用と資質》、《連携の推進》、《行政のマネジメント》と相互に影響していた。学校の運営において、学校にある問題やニーズに対して学校の中の組織や人だけでなく、外部の専門機関や心理職との連携を図ることで、問題解決がスムーズに行われていることが考えられる。またそれによって、連携先である外部機関の活性化が図られ、心理職の雇用や心理職に求められるものへの変化にも影響を及ぼしていると考えられる。さらに、教育の環境をより良く支援しやすくするために、行政と学校とが相互に影響し合っていることが考えられる。

次に、《心理職の雇用と資質》は《連携の推進》、《研究の蓄積》と相互に影響していた。心理職の雇用や求められる資質には、連携している機関から求められている役割や、蓄積された研究や調査のデータによって変化がもたらされていることが考えられる。また、そのような心理職の現状から新しいデータが蓄積されたり、連携機関での心理職の活用法が変化したりする可能性がある。

《行政のマネジメント》は、《連携の推進》と相互に影響していた。行政の政策や試みによって学校と専門機関との連携をより活発に行い、連携における課題を解決するために行政が働き掛けていることが考えられる。また、《行政のマネジメント》は《心理職の雇用と資質》に影響していた。このことから、行政の政策や方針によって心理職に求められる雇用形態や資質・能力が変化することが考えられる。

《研究の蓄積》は《行政のマネジメント》に影響を与えていた。研究や調査によるデータの蓄積によって、行政がより良い教育や支援を行うための政策や方針を打ち出していることが考えられる。

### (3) 本研究の限界と今後の課題

本研究では、学校コミュニティにおける効果的な心理職の活用システムを明らかにするため、教育センターや生徒指導ソーシャルサポートセンターなどの職員計7名に対するインタビュー調査を実施した。前述のように、学校、行政、心理職の相互の関連によって子どもの支援が行われていることが示唆された。

しかし本研究のインタビュー調査対象者は、教員経験のある人物もいたが、現在は行政に関わっている人物のみを対象としている。行政からみた学校や心理職のあり方のシステムを把握することはできたが、あくまで行政側からの意見であり、一面的な捉え方になってしまうという限界がある。つまり、本研究で得られたカテゴリーは、分析に用いたデータに関する限りという限定つきのものであり（木下，2003）、限定された実践現場からの知見であるという限界がある。

そこで今後の課題として、本研究で得られた知見をベースとして、教育現場である学校の管理職からの意見を取り入れ、新たな知見を得ることが必要である。そのことで、実践的活用を促す理論（木下，2003）につながるのである。

### 引用文献

- Anselm Strauss, Juliet Corbin 1998 *Basics of Qualitative Research: Techniques and Procedures for Developing Grounded theory*, 2<sup>nd</sup> ed. Sage Publications. (操華子, 森岡崇氏/訳 2004 質的研究の基礎 グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順 医学書院)
- Flick, U. 1995 *Qualitative Forschung: Theorie, Methoden, anwendung in Psychologie und Sozialwissenschaften*. Reinbek bei Hanburg: Rowohlt. (小田博士・山本則子・春日常・宮地尚子(訳) 2002 質的研究入門——〈人間科学〉のための方法論 春秋社)
- 原田杏子 2003 人はどのように他者の悩みを聞くのか—グランウンデッド・セオリー・アプローチによる発言カテゴリーの生成— 教育心理学研究 51 54-64.
- 原田杏子 2004 専門的相談はどのように遂行されるか—法律相談を題材とした質的研究— 教育心理学研究 52 344-355.
- 石隈利紀 1999 学校心理学 誠信書房
- 石隈利紀/小野瀬雅人 1997 スクールカウンセラーに求められる役割に関する学校心理学的研究——子ども・教師・保護者を対象としたニーズ調査より 文部科学省研究補助金(基盤研究〈c〉〈2〉)研究報告書
- 伊藤美奈子 2002 スクールカウンセラーの仕事 岩波書店
- 木下康仁 1999 グラウンデッド・セオリー・アプローチ—質的研究の再生— 弘文堂
- 木下康仁 2003 グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い— 弘文堂
- Thomas R.K., & Stephan N.E. 2002 *Best Practices in School-Based Program-Solving Consultation Best Practices in School Psychology IV* NASP Publication.
- 山口豊一・水野治久・石隈利紀 2004 中学生の悩み・深刻度と被援助志向性の関係 カウンセリング研究 37 241-249.